

2016.1.25
第1089回例会

2015～16年度
国際ロータリー会長 K・R・ラビンドラ
第2790地区ガバナー 櫻木 英一郎
第3分区Aガバナー補佐 山本 康昭

CHIBA-HIGASHI ROTARY CLUB Weekly Report



Be a gift
to the world

世界への
プレゼントになろう

地区テーマ 「原点を知り、考える」

会長テーマ 「ロータリーを知り、楽しもう」

会長 武田 康
幹事 穴倉 壽夫

本 日 の お 客 様

池田 P P のお客様 菊 波 豊 様

会 長 挨 拶

武田 康 会長



本日はポリオのお話を致します。そもそも、ポリオとは、一般に小児麻痺と呼ばれ、医学的名称は、急性灰白髄炎であります。3才以下の子供に多い病気で、ポリオウィルスが口から入って感染いたします。発熱後に意識障害を起こし、その後、手や足が麻痺するのが特徴的な所見です。我が国でも今から60年以上前は多発していましたが、1961年（昭和36年）を境に患者さんの発生

数は激減しました。この年はポリオの生ワクチンが投与された年です。安全性が確認されていないソビエト製のワクチンを、当時の厚生大臣の「責任は俺がとる」の一言で緊急輸入され、1300万人の小児に投与されたからであります。いやはや、現代の平成の世では想像もつきません。むしろ良くやった・・・と思うばかりです。何故、ロータリーがポリオ予防に取り組んだのでしょうか？

1978年、国際ロータリーの理事会は、3-H プログラム を設立いたしました。

3-H とは、Health（健康）、Hunger（飢餓）、Humanity（人権・人間尊重）の頭文字です。

1979年にはロータリー財団に引き継がれました。1979年フィリピンのあるパストガバナーが、3-H プログラムの一環としてポリオ予防事業を提案しました。生後3ヶ月から3年の小児約600万人を対象に5年間ワクチン投与を行うプロジェクトでした。すると、5年も経たずにその予防効果ははっきりと明らかになりました。

国際ロータリーのメンバーがこれを目に見える成果を挙げられるプロジェクトと考え、1982年の理事会にて「2005年のロータリー100周年までにポリオを世界から撲滅する」と決

定いたしました。

1985年、国際ロータリーは創立80周年に当たり、ポリオ・プラス・プログラムを発表しました。初めてプラスという用語が使用されました。プラスとは、麻疹(はしか)、ジフテリア、破傷風、百日ぜき、結核の予防にポリオを加えるという意味合いです。

その後の効果は著しく、1994年には北米、中米、南米の撲滅、2000年には日本を含む西太平洋地域の撲滅、2002年にはヨーロッパ地域の撲滅を宣言するに至りました。ポリオの99%は撲滅したと言われていています。このように、従来から行われていた小児の主な感染症の予防にポリオを加えたとの意味合いでしたが、ごく最近、ポリオ・プラスの意味がかわりつつあるようです。いままでのポリオ撲滅事業を通しての世界各地にある研究所の連携、官民協力体制の確立など、多くの感染症対策のノウハウが蓄積されました。この経験は他の感染症対策にも使えますし、健康問題全般にも使えることができます。

そこで、ポリオ・プラスとは、「ポリオ撲滅事業がもたらしたプラスの遺産」の意味合いにて使われるようになりつつあります。

ロータリー活動のおかげでポリオが過去の病気となり、次の課題を模索しているなかでの新しい考え方であります。これからも、未来の夢計画と平行してポリオ・プラス・プログラムは継続されます。皆様のご理解とご支援をお願いします。

幹 事 報 告

宍倉 壽夫 幹事



- ◇ 新千葉ロータリークラブから第3分区A親睦ボウリング大会の案内が来ています。開催日は3月16日です。参加希望の方は事務局へ申し込んでください。また、同クラブから創立50周年記念式典の案

内も来ています。4月20日に京成ホテルミラマーレで開催するとのことです。出席希望の方は事務局へ申し出てください。

- ◇ 4月2日の市川シビックRC25周年記念式典の案内が来ています。全員登録ですので、皆さんの参加をお願いします。
- ◇ 国際ロータリーソウル大会の旅行案内をネットランド(株)さんが作成してくれました。参加希望の方は直接会社へ申し込んでください。

新 入 会 員 卓 話

安川 義紀 会員



○ 自己紹介

武田会長からのご紹介で昨年7月から入会させていただきました。安川義紀です。

千葉県生まれ、小・中・高・大学もすべて千葉、会社も千葉と生粋の千葉県民です。同級生の妻と18歳の長男、15歳の長女と4人で四街道市に暮らしております。

会社は「志学書店」千葉大学医学部前に店を構える医学書の専門店です。

千葉県下、茨城を中心に24名の従業員で外商を中心に展開をしております。

創業56年で病・医院さまはもちろん医療関連の養成学校などや製薬会社さんなど医療関連のみなさまへ本や雑誌、電子関連の商材などをお届けしております。

50校を超える医療関連の養成校の教科書もお届けさせていただいております。

基本的に小売業ではありませんが、Dr、Ns、薬剤師の先生など医療関連のお客さまへ最新の医学情報をお届けすることや、これからの医療を担う人たちに教材を提供することで、間接的ではございますが人の命や健康に関わる仕事として誇りを持って業務に勤めております。

本日は会員卓話のお時間をいただきましたの

で、私の職業分類である書店、出版関連の現況と今後についてお話をさせていただきます。

○ 出版産業の構造

本が書店で販売される課程は、本を製作する出版社、本を書店に流通させる取次店といわれる問屋があり、そこから書店へ届けられ棚に並ぶという流れになっており、本は定価販売を義務づけられる再販売価格維持制度に守られ提供されています。

新聞と同じく都心でも田舎でも地域間格差なく同じ金額で購入できるようにまた、価格競争によって町の本屋さんが大型店に負けてくならないように取られている施策です。書店にある在庫の多くは出版社、取次店の委託品であり、なかには買切り品もありますが、ほとんどは不要の際に返品が出来るようになっております。書店の立場からすると他の業界と異なり、売れ残ってしまうものは不良在庫品となるようなリスクは少なくなっています。但し、リスクが少ない分、リターンも少なくおおむね 2 割ほどの粗利しかありません。仮に 400 円の雑誌、文庫が 1 冊売れたとして 80 円の利益にしかありません。その中から、家賃や人件費などの営業経費を捻出するわけですからあまり、利益率の高くない地味な業種といえるかもしれません。

これだけ、利益率の低い業種なので、数多くまた、高い売上をあげなければなりません。現在は「出版不況」とよばれて久しく、売上が下げてどまることを知りません。

○ 売上

雑誌、書籍の売上については 2 兆円産業といわれておりました。

1996 年の 2 兆 6 千億円をピークに下がり続け、2015 年の売上は 1 兆 6 千億円を割り込む見込みとなっております。ピーク時からすると 40% も落ち込んでいる結果です。

昨年はお笑い芸人 又吉直樹の「火花」が芥川賞を受賞し 240 万部を超える大ヒットに沸いたにもかかわらず書籍は対前年でも 1.7% 減となっております。

雑誌も休刊ラッシュです。2014 年の雑誌の休刊は 176 タイトル。2015 年も休刊がつづいていきます。インターネットやスマートフォンの普及に伴い、情報の入手先が雑誌からインターネット

に変わったことが影響しているようです。

出版社にとって雑誌は売上そのものだけでなく、広告としての商材でもあります。

雑誌が売れなくなると購読数が減るわけですから、企業からの広告も申し込みも少なくなります。広告収入も減り、負の連鎖から雑誌の休刊が増えているようです。

○ 出版不況により書店、取次店の廃業、倒産が増えております

書店は 2000 年には 21495 店あったのが 2015 年には 13488 店になってしまい 8000 店もの書店が閉店しております。とくに地方のいわゆる「町の本屋さん」が閉店に追い込まれています。アマゾンをはじめとするネット通販の拡大や人口減による利用者減、売れ線の新刊配本がこない、大型店の出店やコンビニに顧客をとられてしまうことが大きな要因だそうです。

一方、書店数は減っていながらも一書店あたりの売場面積は年々拡大しています。

これは、ショッピングモールが各地域に出来ておりますがそのモールを中心に大型書店が出店する傾向が高まり、雑誌、コミックから専門書まで幅広く大きな売場で展開しています。ネット書店との差別化で実際に本を手にして希望の本を探せると評判ですが、売上を保ち続けることが出来るかという点で難しいようです。出店後数年で売上が落ち始め、その負債を埋めるために新たな別の地区に大型店を出店するという自転車操業に陥っている書店も少なくありません。大手ナショナルチェーンの書店さんも経営の行き詰まりもあってか他業種の会社の完全子会社になり、千葉県下で多店舗展開している書店さんも同様な理由から取次店の支配下による直営店になってしまいました。

昨年 6 月には出版取次 4 位の「栗田出版販売」も 134 億もの負債をかかえ倒産となりました。実に厳しい現状です。

先日、全国展開している大型ナショナルチェーン店の方との話でそのグループ全体だけで年間 1 億円を超える万引き被害があるということを知りました。業界でさらに売上、店舗数のある書店さんは年間 3 億から 5 億円以上被害があるのではといわれております。先程お話したとおり、利益率の低い商売ですので 1 億円の被害をまかなうには 5 億円分の本を売らなければなり

ません。この万引きという犯罪も書店を廃業に追い込む要因の一つのようです。

○ これからどうすればよいのか

負の話ばかりになります。出版不況は日本人の「読書離れ」、「活字離れ」と無関係ではなさそうです。文化庁の調査によるところ、マンガ、雑誌を除く1カ月の読書量は「1,2冊と回答したひと」が34.5%、「3,4冊」が10.9%、「5,6冊」が3.4%、「7冊以上」と回答したひとが3.6%で、「読まない」と回答したひとは全体の約半数の47.5%という結果でした。出版関係者として寂しく思いますし、本が読まれなくなることは、知識、想像力の衰退につながり、とりわけ文化そのものが変容することになります。

最近では多くの学校で「朝の読書タイム」を設けています。

子どものころからの読書活動が多い人ほど「未来志向」、「社会性」、「意欲、感心」、

「文化的作法、教養」すべてにおいて意欲、能力が高いといった調査結果がでています。

読書の推奨は俗にいう「キレやすい子」が減り「集中力、学力の高い子」が育つことにつながると思います。世間全般で読書推進を働きかけ、日本の未来を担う子どもたちが読書をするることによって良い社会になり、日本のよい出版文化はそのまま続いてほしいものと思っています。

今後の出版産業の未来はまったくわかりません。残念ながら次回の増税時に新聞は軽減税率適応となったものの書籍、雑誌は先送りになりました。数年前よりレコード、CDショップが町から減りましたが書店も同じ道を進んでいるようにも思います。

そんななかですが最近では本屋が行政から委託され図書館を運営し、書店が隣接されるというハイブリッド書店が出来たり、書店がカフェを併設し経営したり、書店が雑貨を本と合わせて販売したり、本以外の魅力のある物、コンテンツ、サービスを提供する積極的な複合戦略をおこな

っております。出版会全体は既成概念にとらわれず時代の要望にそった商材、サービスを探し求め、提供していく時期になったとこと考えます。

現在、学校の授業でiPadなどのタブレットを活用し授業が行われることも一部はじまっています。まずは、これからますます普及していくと思われる「電子書籍、雑誌などの媒体」を書店、出版社、取次店が三位一体となって、魅力的な信頼できるコンテンツとして提供していくこと。そしてあらためて原点に戻り本の良さを唱え、国民的読書推進運動を行うことで不況からの脱出を目指していくことになると思います。

不景気の話ばかりとなりましたがロータリークラブでいろいろなことを学び、それを今後の経営に活かし出版不況を乗り越えるよう頑張る所存です。

ご清聴ありがとうございました。

ニ コ ニ コ B O X

武田会長

菊池 豊様、ご入会をお待ちしております。

辻 会員

安川さん、卓話をありがとうございました。今後よろしくお願い致します。

高山会員

ご無沙汰致しました。遅くなりましたが、新年明けまして、お目出とうございます。

合計 9,000円

累計 615,191円

創立：1991年1月21日

認証：1991年3月6日

例会場：ホテルニューオータニ幕張

点鐘：毎月曜日 18:30

事務局：千葉市稲毛区穴川3-5-27 上総ビル303

TEL：043(251)2790 FAX043(251)2726

Email：chiba-higashi_rc@jazz.odn.ne.jp

URL：<http://www.chiba-higashi.jp/>

発行 千葉東ロータリークラブ 会報委員長 藤本 俊哉